

平成21年度宮城県文化芸術振興審議会議事録

- 1 開催日 平成21年11月19日
- 2 出席委員 池田やす子委員, 小嶋圭吾委員, 小山喜三郎委員, 黒川利司委員,
斎藤純子委員, 佐藤雅子委員, 関口怜子委員, 田原さえ委員,
千葉真弓委員, 水戸雅彦委員, 村上和行委員, 村上タカシ委員,
村上佳子委員, 山田悦且委員, 吉川由美委員 以上 15人
- 3 欠席委員 小野田泰明委員
- 4 事務局出席者 今野純一 宮城県環境生活部長
渡辺龍明 宮城県環境生活部消費生活・文化課長
佐藤謙一 宮城県環境生活部消費生活・文化課副参事兼課長補佐(総括)
多田佳裕 宮城県環境生活部消費生活・文化課課長補佐(文化振興班長)
樋口 保 宮城県環境生活部消費生活・文化課主幹
片桐正幸 宮城県環境生活部消費生活・文化課主任主査
内藤照雄 宮城県環境生活部消費生活・文化課技師(主任)
齋藤邦子 宮城県教育庁生涯学習課主任主査
白崎恵介 宮城県教育庁文化財保護課主任主査
- 5 開会 午前9時30分
- 6 会議内容

【佐藤課長補佐】 おはようございます。本日はお忙しいところ審議会にご出席いただきまして誠にありがとうございます。定刻を若干過ぎましたので、ただいまより審議会を始めさせていただきます。

はじめに、開会に当たりまして、今野環境生活部長からご挨拶を申し上げます。

【今野部長】 おはようございます。環境生活部長今野でございます。ずいぶん寒くなりましたけれども、寒いところお越しいただきましてありがとうございます。平成16年の7月に宮城県文化芸術振興条例が施行されまして、その後、この審議会でも6回にわたる審議、答申を経て、平成17年7月に宮城県文化芸術振興ビジョンを策定いたしました。このビジョンの理念に基づいて、「文化芸術の香り高いみやぎ」の創造を目指して、あまり言うところであれですけど、非常に予算の厳しい中で、なかなか思うようにはいかないんですけれ

ども、いろんな工夫をしながらいろんな施策の展開を行ってきたところでございます。この文化芸術振興ビジョンは来年度の平成22年度で5年を迎えることとなりまして、後半の5年間に向けての中間での見直しということで、審議会委員の先生方にご指導、ご助言をいただきたいと考えております。この見直しの作業をするに当たって、今日は見直しの方針・スケジュールなどについてご説明させていただくこととしております。またビジョンの策定の際に審議会からお示しいただきました短期的視点に基づいて方針を転換して実施してまいりましたいわゆる芸術銀河、みやぎ県民文化創造の祭典でございますけれども、その取り組みの経過でありますとか、これまで委員の皆様からこの審議会でもいただいた御意見を整理させていただいて、あらためてご報告をさせていただきながら、意見交換をさせていただければと思っております。どうか忌憚りの無い御意見を頂戴できますようよろしくお願ひ申し上げます。どうぞよろしくお願ひいたします。

【佐藤課長補佐】 次に、前回の審議会以降、新たにご就任いただきました委員の方々をここでご紹介させていただきます。

(黒川利司委員、村上和行委員をご紹介)

次に、前回の審議会以降、事務局の職員にも異動がありましたので、事務局の出席者のご紹介をさせていただきます。

(事務局職員を紹介)

それでは、今日の会議でございますが、今現在16人中15人の委員の先生方にご出席いただいております。定足数は9人でございますので、条例の規定によりまして会議は有効に成立しますことをご報告いたします。次に会議の公開についてでございます。宮城県情報公開条例の規定によりまして、この審議会は会議を公開することとされてございます。今日は傍聴者はありませんけれども、議事録等についても公開されますのでよろしくお願ひいたします。あらかじめご報告いたします。

それでは議事でございますが、審議会の会議は会長が議長になることとされておりますので、この後の進行は佐藤会長にお願ひいたします。よろしくお願ひいたします。

【佐藤議長】 おはようございます。しばらくでございました。それでは議事を進めてまいりたいと思います。まず配付資料の確認について、事務局の方からお願ひします。

(配付資料の確認)

それでは議事に入ります。議題(1)審議事項「宮城県文化芸術振興ビジョンの中間見直しについて」を事務局から説明をお願ひします。

【渡辺課長】 (資料1により、宮城県文化芸術振興ビジョンの中間見直しについて説明。)

【多田班長】 (資料2により、みやぎ県民文化創造の祭典の事業展開について説明。)

(配付資料ガイドブックにより、みやぎ文化芸術振興プランについて説明。)

【佐藤議長】 ありがとうございます。今日はなにかの結論を出さなければいけないというのではないようでございます。今後の後半に向けての取り組むべきことや方向性について答申を来年度行わなければならないということで、それに向けての議論を進めてくれということのようでございますので、皆様から活発なご意見をいただきたいのですけれども、まずは今説明していただいたことに対する御意見ご質問がありましたらどうぞお願いいたします。

【池田委員】 おはようございます。池田でございます。只今、今野部長様から今後の五カ年計画に向けての経緯や、中間見直しと言ったお話を頂きました。先日事前に担当の方が私を訪問下さいました際に、審議会開催内容の確認と意見を言わせて頂きました。私は新しい文化振興ビジョン策定から参加させて頂いておりますが、現在世界的な不況や時代の流れにより、考え方が大きな変化をしております。今後の審議会のあり方等、県として戦略・戦術をお考えと存じますが、ビジョンの文言等の変更を考えるのでは無く、これからの方向性や考え方を検討する中で、審議会の意見を反映していくことが不可欠と考えます。県のご指導のもと、予算が厳しい時代ですから工夫をし、「人・物・金」を考え、多方面との関係作りを強化し、企業や民間を巻き込みながら、今後の実施に向けて努力していきたいと思っております。また、「みやぎ芸術銀河」や各市町村での開催イベント等、20年度の開催も含めて案内は従来からありません。審議会委員参加のイベントは特に参加したいと思っております。皆さま日常的に多忙とは思いますが、土・日曜日開催は参加が出来ると思っております。関口委員参加の「世代間交流シンポジウム」等是非参加したいです。また、せっかく実施するイベントやパンフレットのPR不足を感じます。情報提供することにより、県内に事業所を持つ企業人も参加可能と思われまますので、よろしく願いいたします。

【佐藤議長】 ありがとうございます。何か今のことについてお答えがありますか。

【渡辺課長】 ありがとうございます。現時点での県の考え方については確としたものはないわけですが、これからの審議会の御意見を賜りながら、検討してまいりたいと思っておりますが、ただ漠然とながら今のところ考えておりますのは、財政的には苦しいのは事実でございますが、その中でも文化振興を進めて参りたいと考えてございます。これまでビジョン策定以来、体験型に大きく方針転換してやってきたわけですが、一方で核となるようなイベント型というかそういう形のもの若干見えにくくなってきた部分も確かにございました。そういうわけで今年度も中核となるような体験型とあわせてイベント的なものもやってみたいなど考えていたところ、先ほど紹介した文化庁からの地域文化芸術振興プランというお話をいただいたので、そういう形で展開してございまして、

今後体験型を中心としながらも、中核となるようなイベントとのバランスをとりながら展開していければと考えてございます。また、体験型につきましてもこれまでの取り組みを踏まえて、体験型はあくまでも入り口として次につなげていけるような展開ができればいいのかなとか、県内アーティストの支援とか地域との連携強化みたいなものを考えてございます。また、イベントの実施案内が不十分だった点につきましてはまことに申し訳ないと思っておりますので、今後配慮してまいりたいと考えてございます。

【佐藤議長】 ありがとうございます。他にいかがですか。御意見、ご質問ございませんでしょうか。

【斎藤委員】 これからもよろしくお願ひします。ひとつはこれから先の5年のビジョンを考える上で一度、是非皆さんの思いを聞いてみたいところがあります。思いというのは、知事さんの2期目を迎えての文化芸術に対する施策の方向性とか、あとこの文化芸術振興条例というのは議員の皆さんが中心となって声を上げられたと私は聞いていますので、その方たちの思いも是非聞かせていただいて、いままでの5年間を自分たちも振り返って、そして次の5年間に向けて、本当に財政も厳しいなかでいろいろと生み出していかなければいけない部分がありますので、そこも含めてまずはお聞きしたいなという部分が私にはありました。是非ご検討いただければと思います。

【佐藤議長】 ありがとうございます。これについてはご検討していただきたいということで。他に御意見、ご質問ございませんか。

【吉川委員】 盛りだくさんにいろいろやられていて、予算のない中、難しいと思うんですけど、どれくらい予算的に毎年毎年厳しくなっているのか、そういう数字とかもお聞かせいただきたいなと思います。それともうひとつは、今池田さんがおしゃったんだけど、私もあまり文化ホールとかに行っていないくて、以前にえずこホールに行った時には、えずこホールにたくさんチラシがあつて、こういうことをやっているんだなと分かったんですけど、行かないと全然情報がなくて、自分からなかなか取りに行けないんですね。それで、やはりお金の無い中、これだけの事業を芸術銀河でやっていたと、見せ方をうまくすることで、たぶんこれの3倍くらいやってる感を出せると思うんですよ。ようするにタダで取材にきてもらう方法とか、いろんな方法があるわけで、今なかなか皆さんの目に触れる形になっていないのと、それぞれのイベントが単発の縦割りでポンポンやられている訳ですけど、すべてはこの大きなビジョンのなかでこういうことがやられているというふうにも無理矢理言えるわけなので、なにか見せ方をもう少し上手にする方法、コストをかけないで、というのがあるのではないかと思います。多くの皆さんに興味を持っていただけるような見せ方の工夫がもっとできるのではないかなと思います。もう一つ加えて言え

ば、芸術銀河が今、文化振興課でやっている最大の行事なんだと思うんですけども、そのあり方についても少しこの次の5年に対しては考え直してもいいのではないかなと思います。前の知事さんの時に始まって、各地域の文化協会などの出番を作るという意味でやっているんですけども、おそらくそれぞれの地域の文化協会のあり方や抱える問題もずいぶんもう変わっているんじゃないかなと思うので、芸術銀河のあり方をもう少し変えることによって、効果的にこれらの事業が連携して見えたりとか、効果的に見える方法があるんじゃないかなと思いました。

【佐藤議長】 ありがとうございます。予算的な数字については、私も少し気になったんですけども、今すぐに出してという訳にはいかないでしょうけど、これからもこの内容にそれが出てくる必要があるんじゃないかなと思うんですけど。

【渡辺課長】 県全体の数字でしかすぐにはお答えできないんですが、県全体でいいますと、18年度から今年度までの間で財政再建のためのプログラムを推進してきた訳なんですけど、その中では、18年度から今年度までの間で2,260億円ほどの財源不足が生じるという計算がありまして、それをなんとかしなければならぬということで、21年度まで歳出の削減、歳入の増加などに努めてなんとかやってきたわけでございます。それでも来年度以降、22年度から25年度までの財政見通しでは、4年間で800億円を超える財源不足が生じるという見込みが示されてございます。これに対応して、来年度以降の新たなプログラムの策定を今財政当局を中心に練っている段階でございます。またさらにこれに加えて、今不透明になってきていますのが国の政権が代わった関係で事業仕分けとかいろいろやっておりまして、財源につきましても、暫定税率を廃止するとかいろいろ議論がなされてございますので、今後の県全体の予算の構造が国の動向によって若干不透明な部分もあるという状況です。全体的な話で申し訳ございませんがこのような状況でございます。

【佐藤議長】 私が言いたかったのは、今年度も芸術銀河でやってますとか、やりますとか書いてあるんですけども、そこにはどの程度の予算があるのかなとちょっと思ったものですから。

【佐藤課長補佐】 芸術銀河の部分で言いますと、平成18年度は2,380万円程度の予算で行ってました。それに対しまして、平成21年度は1,400万円、ですから約半分の予算で事業をやっています。ただ先ほどもお示ししましたとおり、予算を圧縮するなどいろいろなところを見直ししまして、たとえば音楽アウトリーチとかは回数自体は減らないように、むしろ増える方向でやっておりますけれども、この予算が変わらなければ、回数的にはそろそろ限界かなというのが今の状況でございます。

【佐藤議長】 ありがとうございます。千葉委員なにか。

【千葉委員】 千葉です。今年もよろしくお願いたします。配付資料に対しての質問ではなくて、お願いなんですけれども。今、斎藤委員や池田委員からもありましたけれども、我々比較的県庁とコンタクトの多いものでも全体でどういうものが行われているのか分からない状況なんです。イベントをやる側が広報しようとする時も逆の立場で苦しんでいるんですね。どうやって皆さんにお知らせしたらいいんだろうかということなんです。今これだけ印刷業界が苦しいなかで、それに輪をかけてはいけません。県庁で文化情報閲覧ホームページを作っただけでいいのでしょうか。つまり、よほどひどいのはボツですけれども、小さい劇団でも、学校のイベントでも、音楽会でも文化祭でもなんでもいいんです。HP であいうえお順や時間順で検索できるものがあれば、印刷費が無くても発信できますよね。バリアフリーのなかにはこういうものもあると思うんです。記者会見する投げ込みポストも必要ですけれども、投げ込み HP というか、なんでも文化 HP みたいなものもあっていいのではないかな。これには管理人程度が必要なだけで、あとは電子原稿で投稿として、責任は投稿した本人にするなど、これからは緩い行政の分野というのが必要なのではないかなと。助けてあげるだけではなくて、おおめに見てあげるといっていいかなと思います。それから普通のテレビが見られなくなりますよね、地上波。まわりにいる人で貧乏学生がすごく多くて、テレビも見られない、新聞も取らない。かろうじてネットだけ見ている人が増えてまして、ネット難民もネットだけにはつながっているんですね。そこだけが最後の情報のよすがなんです。バリアフリーの中にはこれから地域格差と同時に経済格差が出てくると思います。どんなにいいコンサートが行われても、500円が出せない学生たちがたくさん出てくるなかで、ひとつはHP、もうひとつは、県庁ロビーをですね、市場で野菜を売っているのはすごくすてきなことだと思うんですが、今度はコンサート以外にもミュージアムというのもあっていいと思うんですね。例えば、自治体が出て行ってミュージアムをする、私学の学校はこういうことをやっています。べつにメディアテークだけでやらなくていいと思うんですね。メディアテークはピカピカですてきですが、県庁のほうがよほど庶民的に見えるので、ぜひそういう形での、語り聞かせのような講演会などさまざまな棲み分けが可能だと思いますので、そういうお金をかけなくても知恵かけてなんとかなる文化のほうをよろしく応援お願いしたいと思います。

【佐藤議長】 ありがとうございます。続けて池田委員どうぞ。

【池田委員】 今、千葉委員から話がありましたように、お金をかけずにPR というのを私もずっと思っておりまして、県庁ではもちろんHP の開設も必要ですけれども、記者クラ

ブという立派なところを持っているんですよ。そういうところに投げ込みをしていただいて、こんなイベントがありますよとか、あと県庁のロビーで前はコンサートとかやりましたよね。それは県民の人たちが一度や二度行くとロコミで入ってくるというのがあると思うので、そういうところを利用するというのが非常にいいのかなと思うので、非常に賛成です。

【佐藤議長】 他に。村上委員どうぞ。

【村上タカシ委員】 昨年から参加していますが、いままでもいろいろと議論してきましたが、大切なのは蓄積だと思うんです。それを反映させていただきたいと思います。いろいろな意見を言っても空論になってしまうのが非常に残念です。例えばですね、昨年度も話が出ましたが、税収がどのくらいあるのかというので、昨年度 7,840 億円あってそのうちの 0.29%が文化に充てられているというお話だったんですね。それが 23 億円ぐらいあると。今、芸術銀河の予算が 2,380 万円ですか、これで考えると全体の 0.0029%ぐらいの感じになると思うんです。文化に対する予算をどう考えるかですが、最低でも 1%ぐらいは文化に組んだほうが良いと思っています。そう考えると 78 億円ぐらいなんです。いまよく分からないのが、23 億円の内訳です。是非次回くらいまでに、それが箱物の維持費であったり、人件費、事業費であったりとかの内訳を教えてください。また昨年度、ひとつの方向性として示しましたアーツカウンシルを創ったらどうかという議論がありました。芸術評議会のことです。教育委員会の芸術文化版のようなもので、各自治体にそういう組織ができれば継続的にいろんな文化活動ができるのではないかという提案です。また予算があればいろんなことができると思うんです。例えば、新しい美術館を作るとかの箱物ではなくて、大事なのは事業費とかのソフト予算や上手な広報戦略だと思うんです。残念ながら芸術銀河というのは東京や他県ではあまり知られていないと思うんですね。どれくらいの予算がかかっているか、先ほどの話にもありましたが、文化に対する予算が少ないと思うんです。小さな町でもいろいろと戦略的にやっているところはあります。例えば、仙台市の姉妹都市韓国の光州。ここなんかでも隔年で光州ビエンナーレをやっている。同時期にシンガポールや上海でもビエンナーレをやっている。それぐらいの規模のものが東北仙台でもできないものか。これは例えば、先ほど奥山市長さんのミュージアム都市構想というものがありました。仙台市がこういう考えを持っているのであれば、県が例えば 2 億円出す、仙台市も 2 億円出す、というかたちで国際展をやるとかなりのインパクトのある企画ができます。人も集まりますし、文化都市という戦略的なことでも展開できるのではないかと思います。それぐらいのことをやらないと、文化というのは出る物ばかりで浪費のような感じで考えられがちです。実はもっと街づくりにも人づくりにもつながることなんです。今、企業誘致を知事さんもいろいろなさってらっしゃいますが、これも非常に大事なことだと思いますが、企業だけではなくて、クリエイティブな産業であった

り、クリエイティブな人が来るような施策が必要だと思うんです。残念ながら、仙台宮城には芸術大学がない。クリエイティブな人たちが大学の時点で流出しているんですね。東京であつたりいろんなところに。そういった人たちが戻って来ないと、どんどんクリエイティブな人たちがいなくなるという、悪循環だと思うんです。そういう意味では大学だけじゃないですけども、クリエイティブな人が住みたいと思うような場所、魅力的な場所というPRが必要で、国際展ひとつとっても、そういうことをやり始めるとおそらく興味を持って移り住むアーティストとかクリエイターが増えると思います。また長いビジョンで見ただけの場合には、人づくりでは教育というのが大事なんですね。東京の底力というのは、そういうのを小さい時からやっていることです。それは芸術教育の専科制度というんですが、小学校の高学年で音楽とか美術の専門の先生がいます。美大を出たそういう人たちが学校の中で、あるいは学校外でのいろんな活動をいろんな施設と連携しながらやっているんです。学校をひとつの地域の文化拠点としてプログラムができるのですね。これは教育庁と連携しながらできるものだと思います。遠回りのようにも聞こえるかもしれませんが、人づくりを含めたアプローチというのは一番実は近道なんじゃないかなと思います。

【佐藤議長】 ありがとうございます。予算の1%というのはすごい数字ですけども、私は委員会を前から引き受けていて、今、村上先生がずっとおっしゃったようにすごい思いがあつて皆さんいろんなことを言うてくださったんですけど、さてそれが意見として抜粋がでているんですけど、一体これに対して県が具体的にどのように展開したかという点、実際には昨年の続きの事業展開のことしか報告がなかったりですね、あるいは具体化はできなかつたけれどもこんな風に苦労したとか、こんな取り組みをしているとかあるところで意見を言っているのかなとみんな言うのかもしれないけれども、なんとなくちょっと苦しいなという感じがしながら今みなさんの意見を伺っていました。他の人たちもいろいろ意見を言っていたきたいと思います。質問も含めて。お願いします。

【田原委員】 おはようございます。田原です。よろしくおねがいします。村上委員のお話の中で思い出したのですけれども、小学校の先生ってなんでもやらなきゃならないじゃないですか。そういえば私が小学校5年生の時の担任の先生は美術の先生だったんですね。音符読めない、楽譜読めない、ピアノなんてとんでもないということで、なぜか私がいつもピアノ弾かされて、歌の指導からなにかからクラスのなかでやらされたのを思い出しました。5年生ともなれば、センスがある子はどんどん自分に興味があることに取り組みますし、特に今のお子さんたちは非常に成長が早いです。そうするとそこに、時々テレビでもやっていますよね、「ようこそ先輩」のようなことが特別授業じゃなくて日常生活的に行われたらすごく子どもたちの意識も変わるし、父兄の意識もたぶん変わると思うんですが。私もすごく悔しいんですけど東北地方には音楽大学がない。今はカワイとかヤマハとかももうどんどん事業を縮小して、だいたい東北6県のなかで音楽科っていうのがあるのも宮

城学院と郡山女子短大だけになっちゃったんですよ。青森の明の星短大でも音楽科がなくなってしまって、そこの地元のカワイさんがこれからどうやってピアノの先生を探そうと本当に途方にくれているんですよ。ますますそういうふうには東北地方の音楽のレベルがどんどん下がっていくような本当に寒い思いをしています。結局勉強したいと思う子はみんな東京に行っちゃうので、戻って来られない。今、私もふと思ったんですけど、それならたとえば、小学校にたとえ半期でも1年でも、あるいは3ヶ月でもいいし、例えば夏休みの特別レッスンでもいいから、そういう若い先生たち、意欲満々のそういう人たちが帰ってくるきっかけを作るために、公募のような形で小学校の先生を例えば3ヶ月やってみませんかとか、教員採用とは別枠で特別授業みたいなものを設けて、小学校や中学校で実施できないか。そういうことが入り口になればひょっとしたらそれをきっかけに勉強した人たちが戻ってきてくれるかもしれない。そこからまた何か新しいパワーが生まれるかもしれないので、今の村上先生の意見がすごく突破口になりそうだなと。それに池田さんじゃないですけど、私も今小さな音楽事務所まではいかないんですけどネットワークをこれから作ろうと思っていて、あとで吉川先輩にも話を伺いたいと思ってるんですけども、私たちはそういう小さいところから始めていくしかないかと。例えば池田さんのところとか、そういうところへ営業ですよ。とにかく足を運んでいろんな人とコミュニケーションをとっていきたい。もし県の方でそういうことができないのであれば、1年ごとの委託でもいいから外部のそういう人たちに頼んでみたらどうなんでしょうね。これぐらいしか予算はないんだけども提示して、自分たちの文化事業の中でネットワークを作るためのサポートをする人材を民間に委託してはどうか。県の中だけで何かやろうとしたら絶対にできない。市は市で、県は県で、と分かれています、やはり県と市とそれから民間と皆でやっていかないと本当に東北地方はこのままだとマズイと思う。東北6県、特に秋田とか青森とか回っていると、ほんとに危機感がある。もはや県とか市とか言っている時代ではないので、ぜひこちらからも私たちこういうことやりますからどうですか、っていうふうに登信しますから、真摯に耳を傾けていただきたい。そうしたら一歩でも進むんじゃないかと思えます。是非よろしく願います。

【佐藤議長】 ありがとうございます。他に御意見、ご質問ありましたらどうぞよろしく願います。

【水戸委員】 今のお二人の意見の関連になると思うんですけど。まずは予算の話の少ししたいと思えます。日本の文化予算はあまりにも少なすぎるという話です。2006年度ベースの各国の文化予算ですが、日本は一人あたり787円です。フランスは7,855円ですから10倍ですね。イギリスは4,762円ですので6倍です。韓国は3,670円で日本の4.7倍の国家予算を持っています。それからドイツは1,226円で1.6倍ですが、実はドイツの場合は地方の文化予算がとても多いので、それをあわせると、1

5, 297円で日本の約4倍の文化予算です。それからアメリカだけ特別なんですが、326円で日本の半分です。ただアメリカは特殊で、実はアメリカの文化を支えているのは民間の寄付がすごく大きな比率を占めています。それを足すと、5,151円で日本の国家予算と地方の予算をあわせた1.4倍になっています。これが今の日本の国家予算と、いわゆる先進国といわれる国々の文化予算との数字の違いです。でも、予算があればいいというものではないと思っています。先ほどまさに村上委員が言った内容ともリンクしている話なんですけど、なぜ文化が必要なのかっていうことを常に原点に戻って考えなくちゃいけないんだと思います。私が常に考えているのは、地域とか国とかは人がつくりますけれども、人をつくるのは、教育と文化だということです。人づくりがいかに重要かっていうことは、先人がいろんな形でいろんな言葉で言ってきましたけれども、残念ながら今の多くの行政施策はそういう考え方には立っていないということになるんだと思います。今回は中間見直しについての自由な意見交換ということなので、その文化に対する大枠に対する考え方についていくつかお話してみたいと思います。まず教育と文化の関係についてなんですけれども、今の日本の考え方ってというのは、文科省の方針が知識と学力偏重にまた揺れ戻っていて非常に残念なんですけれども、今、社会が求めているのは学力とか知識よりもむしろコミュニケーション能力であるとか発想力であるとか創造性であると言われていています。なぜかという、ひと昔前までの工業化社会においては、知識と学力がとても重要でした。つまりいい物を作って売ればいい、そのためには知識と学力でよかったんです。ところが今、一次産業、二次産業はどんどん海外に拠点が移っていて、国内の空洞化が進んでいます。で、第三次産業が非常に膨らんでいる訳です。そして、これは私が個人的に思ってるんですけども、一次、二次産業も実はサービス産業化してるんじゃないかと思えます。つまり、今は物を作っただけでは売れないわけですね。それに工夫して新たな付加価値を加えたり、流通を開拓したり新たなコミュニケーションツールを作るみたいなことを考えていかないと一次産業、二次産業もたち行かなくなっているわけですね。というわけで、今もっとも必要なのは前の時代に求められた知識と学力ではなくて、先ほど申し上げたコミュニケーション能力、発想力、創造力ということで、こういった能力を伸ばすためには、まさに芸術文化の力がとても重要だということが言えるんだと思います。まあこういう話だけではイメージが湧かないと思いますので、具体例をひとつずつお話してみたいと思います。これはイギリスの例です。イギリスではアーツカウンシルの主導でいくつか事業を実施しています。そのひとつにクリエイティブパートナーシップというものがあります。これは2002年から取り組んでいるものなんですけれども、アーティストやクリエイターと教師が協同で授業を作っていくというプログラムです。例えば、数学の授業です。これをアーティストと教師がつくる。三角形の面を組み合わせた立方体を積み重ねて縦に大きな立体をつくというワークショップをやるんですね。子どもたちはそれを自分で試行錯誤して考えて、それを作ってしまうんですね。でもその立体というのはピタゴラスの定理が分からないとできないものなんです。子どもたちはゲーム感覚でワークシ

ヨップのなかでそれを自ら発見していくんですね、それも楽しく。そういうことによって数学が苦手だった子どもたちがものすごい意欲をもって数学に取り組んでいくようになったひとつの例です。こういうことをいろんなアーティストがいろんな教師と作っていくというのがこのプログラムです。3年ぐらい前の資料ですけども、400億近い国家予算が投入されています。そして55万人の子どもたちが参加しています。そして三分の一の学校がなんらかの形でこのプログラムに参加しています。このプログラムに参加した生徒の学力ですが、英語、算数、理科の成績がみんな高くなっています。さらに90%の校長が生徒の自信、コミュニケーション能力、学力態度が非常に向上したというふうにアンケートで回答しています。イギリスではこの実績をもとに、一昨年から新たな事業を展開しています。これはファインド・ユア・タレントというもので「才能を発見しようよ」というプログラムです。内容は小中学校の子どもたちに週5時間、自分の才能を発見するための授業を組んでいます。どういうことをやっているかという、最高レベルの公演の鑑賞、展覧会の鑑賞、美術館・博物館の訪問、史跡探訪、図書館やアーカイブの利用、器楽演奏の学習、音楽の演奏や合唱、演劇やダンス公演への参加・体験、創造的な作文の創作、作家のレクチャー、映画やデジタルアーツ、メディアアートの制作学習、美術作品・工芸作品の制作、これを週5時間、授業のなかで子どもたちが取り組んでいるということです。イギリスでは90年代以降、アート・芸術文化・教育を通して人、人材を育成しようということを本気で考えています。なぜそんなことをしてるかという話なんです、クリエイティブな能力を持った青少年の育成が新しい産業を生み出し、それが将来の英国経済を支えるという考え方です。この考え方で今イギリスはクリエイティブ・ブリテンというたくさんさんのプログラムを展開しています。この動きというのは実は文化政策と教育政策が融合し、連動した取り組みになっています。さらにこれは将来的な産業政策に繋がっていて、つまりそういう人材が将来のイギリスを支えていくんだという産業政策のビジョンまで持っているということです。こういうビジョンを我々はこれから持たないとだめなんじゃないかと私は思っています。これは今教育の話でしたけれども、こういうふうに複合的な政策を展開することをポリシーミックスと言います。つまり福祉とか医療とかでもこういうことはできるんですね。例えばみなさんイメージしていただきたいんですが、これから超高齢化社会が訪れると言われていています。さて、財政状況がどんどん逼迫していく状況のなかで、医療・福祉予算を膨大に増やしていくことができるのでしょうか。たぶん無理だと思います。それでポリシーミックスの考え方を応用してみると、たとえばお年寄りの生き甲斐対策ということの本気で取り組んでいくことによって、医療費と福祉予算を抑制できると思うんですね。さらにお年寄りが活性化することによって、地域もいきいきしてくる、例えば具体例でお話してみたいと思います。北海道の新冠町の文化ホールが取り組んだ例でお年寄り向けのカラオケ事業なんです、私は最初にカラオケ事業って聞いたときになんなんだろうと思ったわけなんです。文化ホールがカラオケ事業？って。で、彼はこういうふう言うわけです。お年寄りは今、年金もらってお金を持っているんだよ、彼らを

文化ホールで照明をあてて、最高の音響で迫力のあるカラオケをやると、おじいさん、おばあさんたちはすごいステージなのでまず洋服を新調する、そうすると周辺の服屋さんがもうかる、さらにその日はお昼がありますから周辺の弁当屋さんがもうかる、当然そういう立派なステージなので花をプレゼントしたりすると花屋さんもうかる、というふうに実はそのひとつのイベント開催でさまざまな経済効果が生まれる。さらにたくさんのお年寄りたちが文化ホールで生き生きとカラオケに取り組むことによって病院に行かなくなる。病院に行かなくなることによって医療費が抑制されて国保税が下がる、実際にその町では本当に医療費が下がって国保税が下がったというんですね。これはわかりやすい例だと思うんですけども、文化とかアートがどんな力を持っているのかって考えたときに、そんなふうに医療とか福祉とかと連携してすごい事業を展開していけるんだっていうイメージがもてればアートに対するイメージがガラッと変わるんじゃないかと思います。それでポリシーミックスの話なんですけど、なぜ日本は芸術文化の予算が削られていくのかということを考えてみると。基本的にまだまだ狭い意味での芸術文化をイメージしているんだと思います。その狭い意味での芸術文化というのは、例えば従来からの伝統文化であったり、民族芸能であったり、さらにいまいろんな地域社会のなかで取り組まれているさまざまな文化のエリアです。これは表面的にみると、個人が趣味の範囲内あるいはその延長線上でやっているふうにとらえられています。つまり個人が活性化するところでどうして公的予算を投入するんだっていうのが常に文化予算が削られる理由付けにされています。でも今お話した広義での文化政策、つまり文化が地域とつながる、人とつながることによってさまざまな波及効果がある。そういうイメージをもつことによって文化政策自体の考え方が変わっていくということですね。そう考えると、文化政策がいかに重要で、それに予算を投入して事業を展開することによって世の中が変わっていくというビジョンも見えてくるんだと思います。こういうビジョンを持てるか持てないかによって、今後の日本の文化政策は変わっていくのではないかと考えています。ここまでお話したことというのは、知事や議員の方々にご理解いただくための理論というか理由付けというようなことでご説明したんですが、もっと原点に戻って、単純な話なんですけど、私は子どもたちにどういう大人になってもらいたいかっていうと、シンプルに心の豊かな人間になってもらいたいと思っています。そのためにもっとも必要なことは、たくさんのお本物に出会っていろんなことを体験して、いっぱい感動して、それで感受性豊かな人間になっていくことだと思います。それが一番重要なことだと思っています。そしてこういうことが遠回りなのかもしれませんが、ゆっくりと人と地域を活性化させ、豊かな地域社会を作っていくんだということで、さっき村上委員も言われたそのとおりだと思っています。最後に一点だけお話しさせていただきます。県民会館の問題です。まもなく建築後50年を迎えようとしています。ということは建物の耐用年数はほとんどぎりぎり限界のところまできています。施設として現在のニーズに対応できない状況になってます。ということで是非建て替えに向けた新しいビジョンを作っていただきたいと思います。ああいう大きな施設を作るためにはビジョン

を立ち上げてから現実化していくのに、たぶん7、8年あるいは10年くらいかかってしまふんじゃないかと思うんですね。なのでもう今ビジョン作りを始めても全然遅くないと思います。さらにポリシーミックスみたいな考え方を踏まえた文化政策という視点に立った新しい宮城県の文化振興の拠点となるような施設としてつくっていただきたいと思っています。すみません、少し長くなってしまいました。

【佐藤議長】 ありがとうございます。委員の他のみなさま方もまったくそうだなというふうにお聞きになっていたと思います。急には答えをしていただけないと思いますし、これに答えてもらうとまた長くなっちゃいますので、水戸委員の御意見を皆さん心に深く刻んで、またお互いに参考にしたいなと思います。是非この機会に御意見を述べていただきたいと思いますので、他の委員の方もよろしく願います。

【関口委員】 私は「目指せ！ミュージアム都市」という奥山さんの地域づくりの巻頭言の文章を高知の友人から送っていただいて、皆さんに配っていただいたんですけども。何をいいたいのかというと、宮城県はどういう人を育てたいのか、どんな人を育てたくないのか。文化芸術でね。もともと文化と芸術というものはビタミンのようなもの。活力だよ。それらでそれぞれひとりひとりが発揮されて自分から気づき、動く人なんだと思うんですよ。人から言われてなんかするというのではなくてね。それにはお金は少しあればいいんだと思うんです。たくさん経験をすることでもないんですよ。ひとつでもふたつでも心にぐっと詰まるような、自分が揺り動かされるようなアートとか芸術との出会いがあれば、人はもっと違う動き方をしていくんだと思うんです。たくさんするとお金がかかるんですよ。だから本当にいいものを子どもたちに届けたい。奥山さんの資料を配ったのは、私たちは県や市が本当に何を指してこの地域を作っていこうとしているのかよく分からないでいる。たまたま、地域づくりの冊子の巻頭言にこういうことを書いているというのは、みんな知っていました？こういうことを考えて市長が動いているというのは。たぶん知らないですよ。さきほどいただいたみやぎ文化芸術振興プランも、後ろにホームページのアドレスが書いてないのでホームページは作っていないんだなというのがなんとなく分かったんですけど、これはどこに配っているのだろう。文化芸術なんか委員の私たちも知らなかった、知らないことを棚に上げてそんなことを言うのも変なんですけど。そういうふうにも絵に描いた餅っていうのも変なんですけど、つなげ方が下手というか。ここに参加している人たちはそれでもすごくそれなりに宮城県が大好きで活発に動いている人たちなのに、この人たちに到達しなかったというのはやっぱり行政の不勉強ではないか。先ほど池田さんが見せ方の話をしましたけど、つながりというのは結構人間を強くし、前進させるものなんですよ。だからそういう意味ではさっきは見せ方と言ったけど、つなぎ方の勉強もしないといけないかなあと、これが届いてすぐ思いました。さっき齋藤さんも言ってましたけど、もちろん富県というのはとってもいい言葉なんですけど、

富県のなかにお金、私はこのごろお金より物より思い出っ言っているんですけど、経済も大事だけど本当にその人々がそこにいてうれしい、今ここに来ていることが楽しいというのはお金があるからだけなんだろうかと、そうじゃないと感じています。私はもうひとつ、環境生活部のなかの消費生活・文化課の金銭教育を広める係をしていて、いろんな学校に行っしゃべっているんですけど、私はこれを今すごく生き甲斐を感じてやっっているんですけど。子どもたちがたった45分で、あるいはそこに参加した先生もこういう授業の展開があっただけかとか、進め方もあるんですねってとても面白い反応をするので、なおさら喜んで行っているんですけど。45分でなんかを変えられるのはアートだって。やっぱりアートが切り口なんだといつも思っています。そういう意味ではもうちょっと一人一人を動かす何か、つながって動くしかけが必要だと。それから村上さんが言ったように、大きくどどんなんか発信していくような、それでなおかつさきほどのポリシーミックスではないですけど、私は一石三鳥って言っているんですけど、経済的な、あるいは10年後、20年後につながっていくようなビジョンを考えないと。積み重ねているならともかく、いまどきちびちびやっいてもしょうがないだろうという部分もあります。私の日常はちびちびやっっていることなんだけど、平凡の積み重ねが非凡になっていくとか、だからどうつなげていくかですよね。子どもたちと向き合っただけ誠心誠意やっただけではだめなんですよ。なりたい自分の未来につなげるやり方というのには創造力、さっき水戸さんが言っくれた創造力が必要ですよ。その話を県庁のえらい人たちに聞いてもらいたいなあ。奥山さんのミュージアム都市構想じゃないですけど、もう一回富県を考え直すときのベーシックなところとして入れていただきたいというのが率直な感想です。

【佐藤議長】 ありがとうございます。

【吉川委員】 水戸さんの意見に意を強くして。もうなんかあんまり言うのをほとんどあきらめている状況があっ、ちょっとテンション低かったんですけど、さっきのいろんな部局がミックスしてやっということに関して、今年トヨタさんからですね、こちら県とかはお金がないので、トヨタさんだっ何千億の赤字なんですけれど、知事が富県戦略でトヨタさんに関連する企業さんをこちらにお呼びになったということもあっ、一生懸命お願いをして、新しい事業を増やしてくださいということで宮城県にお金をいただいて、学校にアーティストを派遣する事業をやっっているんですね。鳴子の川渡小学校で前半やっったんですけど、子どもたちと一緒に、子どもたちの思い出のある場所の砂を取っきて、それでガラスを作るというプロジェクトでした。かなり時間と非常にお金もかかったんですけど、多田さんもご一緒していただいて、そういうことはどういう感動に結びつくかということがたぶん分かっただけかと思うんですね。どういうことが起っったのか教育委員会のみなさんにも学校現場として見ていただきたかった。教育のなかで芸術教育をやると学力が上がるということで、その話を知事サミットという6県の知事さんがいらっし

やる場で、吉本さんっていうとても政策に通じている方がおっしゃった時に村井知事が一番反応していたのを私は拝見していました。宮城県が突出して学力が低いこともすごく知事は気にされていると思うし、私たちもとても気にしてるんですよ。それで本当に芸術教育をやることで学力は別に図工の点数が上がるわけじゃなくて、それぞれに理解力が上がり、学習意欲が湧いて、学力も上がるんですよ。NPOの私たちはノーギャラで自分の仕事をぶん投げてやってる訳なんですけど、そういうことに対して同じ県の職員に協力してもらえないというのは残念です。それで文化振興ビジョンを語る時に一番最初にもしかして必要なのは県庁職員の意識っていうかそういうところではないかと私は本当に思っていて、だから今日の始めの話はすごいテンション低かったんですけど、ここで言ってもなっていう気持ちがちょっとあったんですけど、けどあきらめないで言うことにしたいと思います。それでひとつ、今日は皆さんの机にも仕分け作業の問題で、国の政策のなかでも文科省のやつがものすごく今予算が削られていて、特に水戸さんが言ったコミュニケーション能力とかいきなり切られていてるんですね。真っ先に切られて、それでたぶんもう難しいと思うんですけど、今日までパブリックコメントを募集しているのでたくさんコメントをいただきたいんです。みなさん是非お力をおと思っています。私ももちろん仕分け作業のコメントを覗いているんですけども、全部これは地方へっていうコメントになってるんですよ。地方でもそんな力は残ってないのに、ここは国でやっていただくしかないなっていうことも全部削られているので、是非みなさんこれに御協力いただきたいとおります。それで文科省で切られているプランも見っていくと、すごく共通しているんですけども、施策の内容が古すぎるんですよ。演劇教育でもってコミュニケーション教育にするってなってるんですけど、分からない人を見ると、なんか台詞を覚えさせられて、松の木になったりなんかして、それがコミュニケーション教育なのかって見られるような内容のものだから切られて当たり前だなって思うんですよ。これは水戸さんが言ったようなことに対してお金を取ってくる上でも、それもコミュニケーション能力だと思うんですけど、我々全員がコミュニケーション教育を受けてないので下手なんだと思うんですよ。これから国際的に戦っていくためには、やっぱり皆さんを説得できるコミュニケーション能力が必要ですし、世界中の人たちは芸術を通してコミュニケーションとは何かということを学ぶべきだと思います。他者や意見の違う人たちと意見をぶつけ合いながら、お互いを理解していくことがコミュニケーションだと思うし、相手の気持ちになるんじゃないくて、相手の立場に立って物を考えるっていうことがコミュニケーションだと思うんですけど、その教育が芸術を通して先例的になされているんですが、残念ながら日本ではそれがなされていません。これはお金がかかることじゃなくて、例えばさつき田原さんが言ったような音楽のネットワークをNPO的にやろうとしてる取り組みがあるし、村上先生のところとかでアートの人たちが集まっている組織があったりして、そういうこととうまくつながって、教育委員会もちゃんと入ってくれてみんなで揉み、あと福祉の分野、医療の分野も一緒に入っただけだと、すごくいいビジョンができていくんだと思うんですよ。もう

思い切って文化振興課だけじゃなくて全部局が集まった文化振興プランにするぐらいの勢いでやったらいいんじゃないかなと思います。

【佐藤議長】 ありがとうございます。ビジョンを作るときはいろんな部署からいらっしやってみんなで考えるというのが前提だったような気がするんですけどね。今日は生涯学習課と文化財保護課からしかいらっしやってないし、教育委員会といってもちょっと分野が違う方がいらっしやってるなって感じなので、そもそもの発想からするとちょっと吉川さんのおっしやるとおりにもっとなってほしいなって思いますけどね。それは佐藤さんいかがですか。

【佐藤課長補佐】 県の文化振興ビジョンに基づいて、毎年度、計画なり実績なりをとりまとめているんですが、それはおっしやるとおり、もともこの文化振興ビジョンというのは、私どもの課だけではなくて、県庁のいろいろな部局が関わっていて、例えば土木であっても、文化に関係するものがあって、そういう事業をとりまとめたものは作っております。今回は冒頭に多田の方からご説明しましたが、ビジョンは10年計画ですすでに5年前に作っていただいたものがあります。前半5年間はさきほどの3つの視点を短期的にやりなさいという答申をいただいたので、私どもはできる範囲でその3つにシフトした事業構成に変えさせていただいたんですが、これからの5年間は、いままでどおり子どもやバリアフリーとかの視点でいいのか、あるいはさきほどから話に出ているように、例えばもうすこし高齢者の視点が必要だとかですね、そのへんの最終的には答申をいただくというのが今回の一連の目的になるということで、もちろん全部の局から呼んでもよかったんですけども、今回は最初の1回目ということでそのへんをご説明するとともに御意見をいただくということで、一番関係のある教育庁の方から来ていただいたという状況です。

【佐藤議長】 わかりました。次に向けて、今年度にもう一度委員会があるそうなんですけれど、見直しに向けての御意見なり、これまでを受けての御意見なり、どうぞ発言をお願いいたします。

【千葉委員】 今、学校教育関係、産業に向けての大きいお話がありました。そちらは一所懸命考えて覚えておきたいと思います。私は目先で動くくせがあるので、11月の1, 2, 3日に白石市でメディアフェスタというのをお手伝いしてきました。尚綱が白石のことを研究した内容を白石の空き店舗で発表するというなかなか大変なものだったんですが、ひとつの例は、孫太郎虫というのがありまして、昔、疝の虫の薬だったんですけど、それに惚れた87歳のおじいさんが山奥に住んでるんですね。3mちょっとの孫太郎虫と6mを超す孫太郎虫の一木作りを作ってしまったんです。それを街中におろしてきて、空き店舗に入れてと思ったんですけど、6mの方は入り口が入らなくて、3mのほうで我慢して

もらったんですけど、それでも大きかったです。そうするとですね、孫太郎虫の研究は学生がパネルで作って、その展示指導は私が行ったんですね、どうやったら調べた物を見てもらえるかっていう教育の一環で私がお手伝いしました。で、取材に来ると街の人たちが元気になります。日頃山奥で彫刻を見てもらえなかったおじいさんが喜びました。それから市役所の人たちが空き店舗と市民の間を結んでくれました。空き店舗を持っていたおじいさんも自然に喜びました。市民が孫太郎虫のところに集まって来て、昔はねっという話で非常に盛り上がりまして、学生も初めて知らない人たちと応対するという一石五鳥くらいのことをやりました。こうなると県にあるのはもしかしたらネットワークの力かなと。ここに使える空き店舗がありますよとか、ここで展示やってもいいよっという人がいますよとか、ここにオープニングパレードでアートっぽい人がほしいですとか、なにしろ東京ではショパンコンクールに出てもよいような人がカフェのピアノ弾きのオーディションにづらづら並んでいるという余り具合と、こっちには誰もいないというこのアンバランスからいくとですね、これは文化の売ります、買いますではないですけども、情報をきちんと仲人してあげるだけでもいいことがあるんじゃないかと思うんですね。もしかしたらアートを漠然とほしいなあと思ってる人や、ピアノやチェンバロってなんじゃないなって思ってる普通の堅気の市民からすると、県庁の人が少し情報整理してあげてわかりやすいメニューを作ってくれることだけでもよい。もしかしたら3万円は出せないけども、電気代だけは東北電力が助けてくれるとか、空き店舗を利用するときには実は最初のネックは電気代なので、それだけで本当に助かる。そういうネットワークを持っていたら、もしかしたら予算以外のところでこういう普段着の取り組みができる。学校にいるうちはまだいいんですけど、社会に出てから社会を信じる力を失っていくんじゃないかと、すごくさみしい思いをしている。だから、なんとかさんありがとうと言ってもらえることのありがたさですね。仕事があれば金にならなくても行くっていつているアーティストが非常に多い。それからお客さんが喜んでくれるんだったら身銭を切るっていつている空き店舗の持ち主もいるなかで、お互いの顔や周りがわかる、信じられる社会をつくれるのはやっぱりアートだと思うんです。という点で、仲人をしてくださって、富県というのでしたら顔の見えるというのが豊かさだと思いますので、そういうのを、ホームページも含めて県の方にお願ひしたいと思います。

【佐藤議長】 ありがとうございます。続けてどうぞ。

【斎藤委員】 千葉さんの表現がとっても素敵で、思わずまた発想が広がることのできたと感じています。街なかという言葉がすごくタイムリーで、空き店舗もそうだし、つながりというのもそうだし、そういう地べたの上でみんなで語り合えるような空間もあってもいいんじゃないかなとすごく思っていました。シンポジウムとかパネルディスカッションとかちょっと構えるようなイメージを抱いてしまう語りではなくて、街なかでカフェやサ

ロンなどを利用して、身近に感じられるような中でいろんな人たちが集まったなかで話ができるというようなこともひとつはアートの凄さのPRというかその魅力というものにつながるんじゃないかと常々思っていました。それこそ県庁のロビーとか、県民会館とか、いまはメディアテークとかでもいろいろやっています。ほんとに人が集まる場所というのが県庁の周りにもあるし、そしてまた県内のなかにもいろいろありますので、そういう肩の凝らないざっくばらんな話といったところも出前としてやっていければ、広い意味でいろんな人たちとのつながりといったこともできると思いました。それとさっき千葉さんが言ったことは、例えば人材バンクとか人とかグッズとかいろんな情報を、県の例えばホームページとかを利用して、集めて、そこに問い合わせしたら、いろんな情報をコーディネートしてくれるというイメージ。

【千葉委員】 「文化のフリーマーケット」？

【斎藤委員】 文化のフリーマーケットね。すばらしい。なんかそういうふうを考えていくと、結構いろんなことがみんなでやれるんじゃないかと思います。お金ももちろんありますけど、やっぱり人をつないでいくといったところを県は担っていてもいいんじゃないかな、できるんじゃないかなと思いました。

【佐藤議長】 ありがとうございます。他に御意見は？お願いします。

【山田委員】 遠くからやってまいりましたので、ひとこと話をして帰りたいと思います。私事なんですがこの夏に半月ほど入院して、暇ですからいろんなことを考えまして、自分のやっている文化振興が本当に正しいのかとか、3月にいただいた資料も全部読み通して、いろいろ考えてみました。そんななかでまず、県から造っていただきました登米祝祭劇場が今年9月に満15歳を迎えて、万が一この劇場がなかったら登米市の文化ってどうなっていたのかな、つまりいろんな市民が集って来て下さって、金が無いなりにそれなりに劇場型、市民参加型の文化発信ができていることを、やはり県当局や県の財団の方々に、もちろん他の文化関係者の方々に感謝申し上げるべきだろうということをまず前提に考えました。ただしというところで、疑問が生じました。登米祝祭劇場はご存じのように、えずこホールさんもそうですけども、宮城県の広域圏活性プロジェクト推進事業として誕生した訳ですが、私は劇場にからむ前に群馬県の高崎市に住んでおりました。市役所に事務所があり、目の前に群馬音楽センター、群響の本拠がありました。群馬音楽センターというのは、記憶によりますと、1961年、今から50年ほど前にフランク・ロイド・ライトの高弟であったアントニン・レーモンドの設計によって造られた音楽ホールです。打ちっ放しという点では登米祝祭劇場と全く一緒なんですけど、使い勝手という点ではきわめて雲泥の差がありましてですね。50年前に造られた群馬音楽センターがこんなに使いやすく

て、15年前に造られた登米祝祭劇場がなんでこんなに使い勝手が悪いんだと。建設が始まったのが平成5年でございます。平成5年というのは、実は現在私たちが見直しをしております文化芸術振興ビジョンの前身となります文化振興ビジョンが制定された年度であります。つまり当時の宮城県の文化振興ビジョンが登米祝祭劇場に凝縮されているのではないかと考えた訳です。つまりどういうことかということ、地域に大きな建物がありませんのでランドマークとしての機能は持っておりますが、私たちのなかでは、5館の中ではリアスアークよりはよかったよねっていうのが合言葉なんです、登米市民の。リアスアークもお邪魔しますとあれも大変ですよ。バスはもうすでにありませんし、建物そのものを斜面に造って、修繕はどうするのかなと心配ばかりしていますが。それはさておいて、当時の宮城県の文化行政の根底の考え方を具象化したのが私どものホールだと思います。つまりその根っこがですね、15年経って今我々にいろいろ議論しようといいますが、その根っこそのものが変わっていないんじゃないか、つまりそれを否定しないとですね、この話って進まないんじゃないかなって、実は夏に考えていたんです。あつてありがたいんですが、やはり文化って造ってやったぞっていう思い上がりでは駄目なんじゃないか。で最近金がない、金がないって、じゃなんなのよって、あんたたちの誰かさんの名前を定礎に刻むために造ったわけじゃないんでしょって言いたいわけですよ。というわけで、一度ご計画なされた職員の方を呼んで、我が大ホールでご講演していただきたい、当時の宮城県の文化振興の根底にある根というものがあるのか、たぶんその方はヘルメットをかぶって、宮城県警から盾を借りて来ないとたぶん帰れないんじゃないかと思うぐらいいたぶん椅子とか飛んでくるんじゃないかと。そういう心持ちで登米市のみなさんはいらっしゃいます。でもその声は登米市から出ることはございません。それは全部私どもにきてしまいます。私どもの劇場の脇を北上川の支流の迫川が流れております。その脇に地下式に掘り込んであるんですね。15年間、私も知らなかったんですが、ひたすら地下水を劇場の下に溜め込むんです。それを毎日ポンプでくみ上げている15年なんですよ。それが故障してしまっただけです。修理しようとしたが、どこにあるか分からない。野外ステージの升、もしかしてこれじゃないかと鍵を開けたら、一人じゃ開かない。で、開けましたところ、東北電気保安協会の方がいらっしゃって、漏電だと。あふれて入らない状態。つまり15年の間に地下式の水中ポンプが壊れていたと同時に、漏電になっていて、非常に危険な状態になっていた。そのまま放置すると、地下が埋まってしまう。水ですよ。そういう構造になっている。実は今月の頭にも、3個の水中ポンプが壊れまして。いくつあるのか分からない、水中ポンプが。それが次々壊れていくんですよ。さらには役に立たない池、劇場には4つの池があるんですが、これは実は滝なんです。劇場に滝、つまりなんのための施設だったのか。設計士が目立つ、自分のウェブサイトこんなものを造ったよと載せるための建物ではなかったのか、というような疑いをずっと持っているんです。ですからちょっと厳しい言い方かもしれませんが、当時担当なされた方が全員お辞めになったとはとても思えませんので、一度ですね、お越し下さい。パレット大崎さんもええこホー

ルさんもエポカ21もそうなんですが、ランドマークとしては極めて素晴らしいんですが、当時として、何を主目的に造ったのか、たぶん私たちはやっているよ、文化を発信しているよ、県民のためにやっているよ、っていうことを形で見せるための建物でなかったのか。その発想が15年経っても変わらなかったら、どんな見直しをしても直らないじゃないかという考えでおります。

【佐藤議長】 ありがとうございます。

【吉川委員】 その経緯は私が登米祝祭劇場の初代プロデューサーなのでよく分かっているんですね。前の前の知事さんの代に、なぜか調査で登米はクラシックを主体としたホールにしたほうがいいっていう結論になったんですよ。なぜかそういう調査になったんです。それでザルツブルク音楽祭みたいなものを登米でやるんだって発想で、こんなに分厚い運営計画があったんです。バブル絶頂の頃です。しかし知事さんが残念ながら捕まって、その計画は消えたんです。そのソフトありきであのようなホールになったのです。だからふつうに使うには使いづらいのは当たり前なんです。その特殊なソフトのためにあのホールは出来たのですから。ただ私が入った時点で、例えばシーリングライトの位置とかそういうものもとても問題がありました。ホールというのはプログラムと一緒に建てなければならないという発想で始まった宮城県で最初のホールですから、決して悪いことではないとは思いますが。ただ、えずこも使いやすかったっていうと大変ないろんな問題を抱えているんですが、水戸さんたち職員の大変な知恵と前向きな発想で、それを物ともせずかなり頑張っている人がそれをカバーしております。あのホールはとても面白い作りなので、前向きになれるととても面白いこともできますので、っていうことで出来ていると思います。だからどこもリアスアークもバブルのころだったので、運営資金がたっぷりあるってことを見込んで、こんなに分厚い運営コンセンサスを元にあれを造ったのです。だからその責任を問うよりは、ちょっと違うことを考えたほうがいいかなと思います。

【佐藤議長】 まだ御意見をおっしゃっていない方、是非お願いいたします。

【村上佳子委員】 本日始めて参加させていただいております。皆様の活発な御意見に感心しておりました。文学館という立場におりまして、ワークショップやその他の情報をいろいろいただいております、事前に見てもおりました。また芸術銀河に多少ともご協力させていただくこともありました。私どもも文学と演劇の融合というものを事象化しておりますけれども、コミュニケーション能力、人をつくるという意味で、非常に大きく子どもたちが変わっていく、学校が変わっていくっていうのを見ておりますけれども、実際には一朝一夕にはできないことだと思います。また全県域を対象とするということで、とても大変だなと思っているんですけれども、実際の反響というか手応えというか、その結果

みたいなものを3年間銀河をやってきてどのようだったのかなあというのをちょっと伺いたいと思っておりました。特にワークショップに力を入れてきたということで、アーティスト側は非常に力のある方が行っていたりすると思うんですけど、子どもたち、また地域の方々にどのように受け入れられたのか伺えればと思います。

【佐藤議長】 それをちょっとお願いいたします。

【事務局】 子どもたちの表情については、私どもも現場に行っておりまして、非常に最初はひくんですけれども、45分なり50分の授業の中で、非常に前向きに能動的に参加していくといったことで積極的に参加していくというふうになってまいります。その後、特に印象的なことは、講師のところに生徒たちが寄ってきて、そのあとに続くようなことが多く見られているということがあります。アウトリーチ、ワークショップはコンサートなどと違まして、講師との距離が非常に近いと言う形で事業を実施してまいりますので、子どもたちひとりひとりに与えている影響、感受性に訴えかける部分、人格形成、人間形成に訴えかける部分というのは非常に強く、イベント型よりも出てきているのではないかとこのように判断いたしております。直接的な部分ということについては、水戸さんのところでいろいろとデータなり実績なりがあると思いますので、補足していただくと助かります。

【水戸委員】 効果みたいな感じですね。なぜアウトリーチをやっているのかということになると思うんですけど。ただ単に鑑賞するだけでは伝わらないことがいっぱいありますよね。先ほどの話でいうと、人作りというふうにみた場合に、創造性を引き出すとか、コミュニケーション能力を引き出すというようなこともとても重要なんですが、アウトリーチの場合は単なる鑑賞ではなくて、参加体験型のワークショップをかなりからめています。ですから優れたアーティストに触れることによって、さらに自分が能動的にそこに関わることによって自分の何かが目覚めるということが、いろんなところで起こっています。これを学校の現場で実際に見ていただくとすぐに分かると思います。うちの場合は音楽と演劇とダンスと何種類かアウトリーチをやっているんですが、それぞれやっぱり子どもたちの反応がすごいですね。アーティストの人たちがいかに子どもたちの能力を引き出す能力を持っているかということは、身近で見ているといつも痛感することです。

【村上佳子委員】 非常に効果的だというふうな、何か可能性がある事業だということですね。それをこの芸術振興プランのなかでこれだけの数をやって、これだけの実績になっているだと思いますので、次のビジョンを作っていくときの現状の実績として、それを踏まえながらまた広げていけばいいのかなあと思いました。

【佐藤議長】 ありがとうございます。

【小嶋委員】 文化施設のない、文化会館もない角田から来ました。ですから一流アーティストというのは私たちのところには見えません。しかし、子どもたちが情緒不安定になっている状況ですからね、残虐な事件が起こったり。なんとかしなければということで、県の文化協会には約4万3千人くらいの会員がおり、各市町村にも当然たくさんおられます。今、教育委員会とか皆さんにお願いしたいなあと思っていることは、前にも話したことですけれども、文化協会に加盟しているいろんな方々を活用して下さい。お金はいりません。かかりません。ですから、伝統芸能であろうと、あるいはちぎり絵であろうと、三味線であろうと、折り紙であろうとなんでもいいです。私どもを使って、活用していただければね、いくらかでも文化に馴染んでくるんじゃないのかなというふうに思っております。ただ今のところ、インフルエンザがはやって、学校は学級閉鎖、学年閉鎖になって、そのあおりで4講義が5講義になったり、冬休みを短くしようなんてことで、どうも私どもが学校に出前に行きたいなと思ってもなかなか今は難しいようであります。これは市町村や教育委員会のほうにもお願いしたなと思うんですけど、学校の校舎の中でなくてもいいんです。公民館でもいいんです。県内にはたくさんのいろんな使命を超えた一流の方々が文化協会にはいるわけですから、活用していただきたい。ことに子どもの居場所なんていうのはなかなかないでしょ。あるいは塾とか稽古事に行っただけ、なかなか一流あるいは専門家の話、あるいは技術などを見る機会が少なくなっているのですね、ですからなんとか教育委員会のほうにもお願いしてですね、学級閉鎖になっている最中にはありますけれども、文化協会の会員のなかにはたくさんの優秀な人材がおられますから、活用していただきたい。前回もこの話をお願いしたと思いますけれども。身近にあるものを活用していただきたい。皆さん、なにかあったら、地元の文化協会に声をかけてください。いろんなジャンルのものがありますので、どうぞご利用ください。

【佐藤議長】 ありがとうございます。

【黒川委員】 今日始めて参加させていただきましたけれども、さきほどの御意見のなかにですね、文化芸術とそれから教育との出会いが人作りの上で非常に大切だという御意見がありまして、全く私も学校教育に携わる者としてそのとおりで思っております。ただ、ご存じのとおりですね、少子化によりまして、学級数が小学校も中学校も高校も減っております。学級減が各地で行われているということは、当然のことながらそれにとまって教員も減っているということになります。その結果、中学校では例えば音楽の免許を持ってない先生が免許外で音楽を教えたりとかですね、美術の専任の先生がいなくても数学の先生が美術を教えたりとかしている状況がございます。それから高校におきましても、音楽、美術、書道の3つの教科をそろえているという学校はほとんどないかと思っております。

学習指導要領の趣旨からすれば、子どもたちが音楽でも、美術でも、書道でも自分の興味・関心に応じて選択しなさいということにはなっているんですが、現実には教員の数が少ないものですから、そこまで3つ用意できないという学校がかなり多いかと思います。そしてまた、学校週5日制にとまなまして、授業時数は確保しなければ、しかし授業時数は減っている、そうすると学校としてどうしてもやはり、学校行事を減らさざるをえないというところがありました。各学校とも行事の統廃合という名のもとに学校行事を減らしてきたということがあります。しかし当然のことながら、文化芸術活動が大切だということは各学校の校長たちもすべて認識しておりますので、一年間の学校教育活動のなかでなんらかの子どもたちに出会いの機会を設けたいと思ってそれぞれの学校がいろいろ工夫しているところだと思います。さきほど聞きましたところ、例えば音楽アウトリーチですよ、これによって小中学生、高校生ぐらいまでの子どもたちが生き生きとしているとご報告がありました。大変うれしいことだなあと思っております。やはりもっと我々が、小中学校もさることながら、高校においても、高校での文化芸術活動というものが社会に出てからも文化芸術活動に携わっていく、例えば合唱部で活動したという者がママさんコーラスになっていくとかですね、あるいは吹奏楽をやっていたという子どもたちが社会に出てからも一般の吹奏楽団のなかで活動していくとか、そういうふうに世代を超えてつながっていけるように、高校の方でもこういった事業があるんだということの周知を図る必要があるんじゃないかなあと思って聞いておりました。

【佐藤議長】 ありがとうございます。では、小山理事長、お願いいたします。

【小山委員】 いろいろみなさんの考えを聞いておきますと、次回の進め方とかねらいがだんだん分かってきたような気がいたしました。非常に今日は有意義だったと思います。ただ最初のときの委員会の時から気になっていたんですけれども、最初、県の部局の方が全部お出でになって、とうとうと自分たちの部局のやったことを述べられていたことを今思い出していたんですけれども、これは我々の入る位置がここであるのかなあとその時、率直に思いました。それから何回も言っていますけれども、入場者の数とか何人参加したとかそういうことで計っているような各部局の話ですね、成果をしゃべられているのを聞いていると、文化行政がここに入り込んで委員会をつくるのは大変なことだと思っております。そういうこともちょっと注意したいんですけど。あと文化庁の予算が減ったということでしたが、あの事業仕分けの会議の考え方の基本はですね、そういう方法とか政策とか議論していったら、文化は全部負けてしまうと思うんです。あの毛利さんが答えたことが一番私は意味が分かるんですよ。あれはいいことをおっしゃっているんですけど、やっぱり批判されましたですね。毛利さんの理想、ああいうことを少しこの次みなさんと話して、方向性が決まっていけばと思っております。

【佐藤議長】 ありがとうございます。みなさん、まだまだ思いがたくさんあると思いますが、この次の委員会でまた是非お願いしたいと思います。今日の意見は次回までに事務局のほうでまとめていただけるということになっておりますので、また次の話し合いに生かせるようにしたいと思います。それでは事務局にお返しいたします。御協力ありがとうございました。

【多田班長】 この審議会につきまして、会議録を公開することになっております。つきましては、事務局のほうで会議録をとりまとめた後に、皆様にご確認いただきたいと思っておりますので、その際はよろしくお願いたします。

【佐藤課長補佐】 今日出た意見のなかで、予算の内訳とかは次回までの間に作成しましてお届けするのようにしたいと思います。長時間にわたりまして大変ありがとうございました。今年度中、おそらく年明けだと思いますが、もう一度やらさせていただきます。その時に諮問して、来年度中にビジョン10年期間のうち、残り5年間の重点事項を決めていただくというような作業をしていただくという予定でございますので、よろしくお願いたします。どうも本日はありがとうございました。

7 閉 会 午前11時30分